



衣川 重介

## 『梵鐘 奇跡の帰還』

菅原道真お手植えの松があったという古い天満宮が高砂市曾根町にあります。山陽電気鉄道（株）（通称：サンデン）の曾根駅すぐ北、徒歩5分ほどのところに広大な敷地を持っています。ここの観音堂に穴あき梵鐘があると知り11月3日、見に行きました。観音堂は西隣、天満宮の立派な門をくぐり境内を歩いて向かいました。好天の中、若い男衆が大勢で藁を扱い、縄をなっています。『正月のしめ縄の準備ですか？』声を掛けると『ハイ』と元気な声がかえってきました。

すでに、撞かれている形跡がない梵鐘は陽鑄で中央に天満宮 奉寄進華鯨 氏子中 右に 播磨國印南郡伊保庄曾根邑 左に 元禄十年丁丑（ひのとうし） 商音二十五日 と記されている大きな朝鮮鐘です。（口径 850mm、駒爪 85mm 推定重量 800 kg）文字の反対側には直径15.5φmm、5ケのドリル穴が開いています。供出された後に材質検査をした穴です。梵鐘の内面に白いペンキで印南郡 曾根町 観音堂 と書かれています。これは誰が書いたのだろう。穴あき梵鐘を調査されている清水（きよみず）啓介氏の資料には内部に白いペンキで寺社名・所在地が書かれていた梵鐘が10口以上確認されています。私が見た4口の梵鐘（蓮花寺・春日神社・住吉神社とこの曾根天満宮）では初めてでした。



銘文



読売新聞の 穴あき梵鐘 戦争語る の記事には、体験談として、復員後に香川県・直島の三菱鋳業直島精錬所（当時）へ就職した中村政太郎さん（87）（香川県直島町）によると、終戦の翌年1946年の時点で、製錬所には吊鐘が30個ほど残っていたという。持ち主がわかるものは船で兵庫県などの港へ運搬し、その後、各寺に返却した。中村さんは「作業員がお寺の鐘を溶かすのをはばかり、溶解しなかったものもあったようだ」と証言する。

（2015/12/26 読売新聞夕刊の一面トップ記事より一部転載）

敗戦の混乱期、幸いにも元の寺社へ帰って来た梵鐘は、穴あきのものが50口確認されていますが、誰が、いつ、返却の指示を出したのだろう。それぞれの寺社ではどんな方法で引き取り、元へ戻したのだろう。前掲の資料の中に一つだけ具体的に記載されていました。

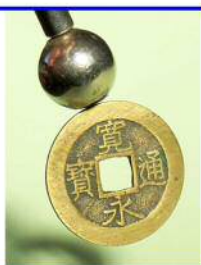
堺市南区にある高倉寺の梵鐘です。住職が官報で調べ「皇室関係・大名鑄造・名工鑄造」は供出しなくてよいと知り、岡山の直島へ取り戻しにいったが既に穴が開いていた。大阪港まで船、寺まで牛車で運んだとあります。

商音（しょういん）：8月の別称 華鯨（かげい）：梵鐘の別称

来て！見て！ふれて！

ふしぎ体感

「鉄のふしぎ博物館」



むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！

本年 | 年間ご愛読ありがとうございます！  
来年もよろしくお願ひします！

天満宮 奉寄進華鯨 氏子中  
元禄十年丁丑 商音二十五日